

【B年】三位一体主日(2026年5月31日)

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

【旧約聖書日課】申命記 6章4～9節

4聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。5あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。

6今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、7子供たちに繰り返し教え、家に座しているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい。8更に、これをするしとして自分の手に結び、覚えとして額に付け、9あなたの家の戸口の柱にも門にも書き記しなさい。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙8章12～17節

12それで、兄弟たち、わたしたちには一つの義務がありますが、それは、肉に従って生きなければならないという、肉に対する義務ではありません。13肉に従って生きるなら、あなたがたは死にます。しかし、霊によって体の仕業を絶つならば、あなたがたは生きます。14神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。15あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、「アッバ、父よ」と呼ぶのです。16この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒に証ししてくださいます。17もし子供であれば、相続人でもあります。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです。

【福音書日課】マルコによる福音書1章9～11節

9そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。10水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。11すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

申命記 6章4～9節

4聞け、イスラエルよ。私たちの神、主は唯一の主である。5心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くしてあなたの神、主を愛しなさい。6今日私が命じるこれらの言葉を心に留めなさい。7そして、あなたの子どもたちに繰り返し告げなさい。家に座しているときも、道を歩いているときも、寝ているときも、起きているときも唱えなさい。8その言葉をするしとして手に結び、記章として額に付け、9また家の入り口の柱と町の門に書き記しなさい。

ローマの信徒への手紙 8章12～17節

12それで、きょうだいたち、私たちは、肉に従って生きるという義務を、肉に対して負ってはいません。13肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬほかありません。しかし、霊によって体の行いを殺すなら、あなたがたは生きます。14神の霊に導かれる者は、誰でも神の子なのです。15あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、子としてくださる霊を受けたのです。この霊によって私たちは、「アッバ、父よ」と呼ぶのです。16この霊こそが、わたしが神の子どもであることを、私たちの霊と一緒に証ししてくださいます。17子どもであれば、相続人でもあります。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共に栄光をも受けるからです。

マルコによる福音書 1章9～11節

9その頃、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。10そしてすぐ、水から上がっているとき、天が裂けて、霊が鳩のご自分の中へ〔異本→上〕降って来るのを御覧になった。11すると、「あなたは私の愛する子、私の心に適う者〔直訳→私はあなたを選ぶ〕」と言う声が、天から聞こえた。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・5月31日「三位一体主日」の日課主題は「神の子とする霊」。「聖霊降臨日(ペンテコステ)」に続く主日は、10世紀以降の西方教会で「三位一体主日」として記念されてきた。「三位一体」は、「御父・御子・聖霊」と呼ばれる神の各位格相互の関係性を表明する神学用語。「御父・御子・聖霊」をめぐる神学論争(三位一体論)は、初期教会以来の古代教会で教会の一致を揺るがす問題として断続的に続けられていたが、4世紀、ローマ皇帝コンスタンティヌスによる公認から始まるキリスト教の国教化の過程で、皇帝の招集した最初の公会議(325年、ニカイア)の主要議題とされた結果、正統教義としての「三位一体論」を定式化した「ニカイア信条」が採択され、これが東西の主要教会における正統性基準とされてきた。ただし、東西両教会でそれぞれに用いている正文(東方原典はギリシア語、西方原典はラテン語)では、「聖霊」の発出源に関する記述に相違が生じている(西方教会では、東方教会の正文に無い「と子(フィリオ・クエ)」が含まれている。

・旧約日課は、「申命記」から、イスラエルに対して主なる神への愛を命じる箇所。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、「神の霊」を受けられた「神の子」としての信仰者の自己理解を確かめる箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、主イエスの洗礼を伝える箇所。

ニケア信条(ニカイア・コンスタンティノポリス信条)

私たちは、ただひとりの神、すべてを支配される父、天と地と見えるものと見えないものすべての造り主を信じます。

また、ただひとりの主イエス・キリストを信じます。主は神のみ子、御ひとり子であって、世々に先立って父から生まれ、光からの光、まことの神からのまことの神、造られたのではなくて生まれ、父と同質であって、すべてのものは主によって造られました。主は、人間である私たちのため、私たちの救いのために、天からくだり、聖霊によりおとめマリアによって受肉し、人となり、私たちのためにポンティオ・ピラトのもとで十字架につけられ、苦しみを受け、葬られ、聖書にあるとおりの三日目に復活し、天にのぼられました。そして父の右に座しておられます。また生きている者と死んだ者をさばくために、栄光のうちに再び来られます。そのみ国は終わることがありません。

また聖霊を信じます。聖霊は主、いのちの与え主であり、父(と子)から出て、父と子と共に礼拝され、共に栄光を帰せられます。そして預言者によって語られました。私たちは、ひとつの聖なる共同の使徒的な教会を信じます。罪のゆるしのための一つのバプテスマを認めます。死者の復活と、来たるべき世のいのちを待ち望みます。アーメン。

(日本キリスト教協議会共同訳『讚美歌 21』所収)

旧約日課(申命記 6章より)

・「申命記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の区分で「律法(トーラー)」の第五巻。同第二巻の「出エジプト記」から始まる「モーセ物語」の完結部を構成する。本書の大部は、エジプトからイスラエルの民を連れ出し、シナイ山での律法授与を経て四十年の荒野の旅を導いてきたモーセが、自身の最期を自覚して人々にこれまでの旅路を振り返りながら律法(トーラー=教え/指示)を再告知するという体裁で構成され、残りの結部では、モーセの後継者指名と訣別の辞、またモーセの死に関する記事が置かれている。

・本書中、モーセが律法を再告知する体裁で構成されるのは4:44から28章まで(29~30章も「モアブでの契約」という建付けで置かれており、内容的には律法に準ずる)。そこでは、「出エジプト記」19章以下で展開する「シナイ契約」と同様、まず「十戒」が提示され(5:22)、そこから諸々の律法(教え)が提示されていくように構成されているが、具体的な「戒め」や「定め」や「法」などが提示される前に、それらを守るべきイスラエルの取るべき態度や、それら諸々の規定が命じられる意味が告げられている(5~11章)。

・4節「聞け、イスラエル(シマ・イスラエル)」は、9:1でも繰り返される呼びかけ。語順を変えた「イスラエルよ、聞け」(5:1、20:3)と共に、本書に特徴的な呼びかけ方となっている。また「シマ・イスラエル」は、本節(6:4)や民数記 15:37~41などに基づいてユダヤ教会堂で用いられている信仰告白的祈禱文の呼称ともなっている。これは、一般に「シマの祈り」とも呼ばれている。また、続く5~6節の指示に基づいて「シマの祈り」を教えたり、小さく記したものを身に着ける習慣がユダヤ人の間で受け継がれている。

・4節の「聞け、イスラエル」に続く句は、語順通り直訳すれば「ヤハウェ(主)、我らの神、ヤハウェ(主)、唯一」。「ヤハウェ(主)が我らの神であり、ヤハウェ(主)は唯一」と訳すことも可能。また、別解釈として4節を、「聞け、イスラエルよ、ヤハウェ(主)我らの神に、ヤハウェ(主)だけに」と訳す聖書学者もいる。

・4~5節は、新約・福音書で主イエスが「最も重要な掟(戒め)」の第一として挙げた引用聖句として伝えられている(マルコ 12:29~30、マタイ 22:37~38。またルカ 10:27も参照)。

使徒書日課(ローマ 8 章より)

・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に置かれた書簡文書。パウロが未訪のローマ教会共同体に宛てて、同地への訪問計画をあらかじめ伝え、また同地訪問後に計画しているエスパニア伝道への協力を求めるために著された。本書簡でパウロは、ユダヤ人と異邦人の救済史的経緯の違いによる救済過程に相違があることを認めつつ、旧約の「アブラハム物語」等によって示される信仰論や律法論を根拠に、両者に適用され得る神の普遍的救済計画をキリスト論として提示している。

・日課箇所は、キリスト信者がキリスト信仰(キリストに結ばれる洗礼)によって与えられる「神の子」という自己理解に基づいて生きるべきことを、「神の霊」の授与という根拠に基づいて弁証的に論じている。

・14 節「神の子(ら)」は、ギリシア語「ヒュイオイ・テウー」の訳で、イエス・キリストを「神の御子」という場合と同じ表現の複数形が用いられている。15 節「〔神の〕子とする」も、ギリシア語「ヒュイオテシヤ」(＜ヒュイオス+テシス)で、「御子」と訳される「ヒュイオス」の派生語。「ヒュイオス」は、本書簡中 12 用例があるが、内 8 例が 8～9 章中の議論の中で用いられている。他方で 16 節および 17 節の「〔神の〕子供」は、ギリシア語「テクノン」の訳。「テクノン」は、本書簡中 7 用例があるが、すべてが 8～9 章中の議論の中で用いられ、しかも、ほぼ「ヒュイオス」と並列して使用されている。辞書的には、「ヒュイオス」が親子(場合によっては師弟なども)の関係性に基づく「子(息子、あるいは弟子!)」を意味するのに対して、「テクノン」は血縁に基づく「実子」を意味するとされる。つまり、「ヒュイオス」は事後的あるいは法的に関係性を結びうる「子」であるが、「テクノン」は出生によって決定される「子」である。日課箇所中では、信仰者が「神の子」であるのは「神の霊」によって事後的(法的!)に与えられた養子的立場であることが示されながら、他方で、相続に関連してその法的根拠が「子供」(＝実子、嫡子!)であることにあと論じられている。パウロは、人の「神の子」としての地位を、養子論的にも説明するが、「キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けた」(6:3)者としてキリストと共に新たに「神の子」として生まれさせられているとも考えている。

福音書日課(マルコ 1 章より)

・日課箇所は、主イエスの洗礼の出来事を伝える箇所。共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えると共に、ヨハネ福音書もその出来事を前提としていると考えられる。この出来事は、先行する宗教家「洗礼者ヨハネ」のもとで洗礼を受けられた主イエスが、自身の洗礼そのものを聖霊降臨と「神の子」宣言によって新たなものとされた出来事として端的に描かれている。このことを「洗礼者ヨハネ」の立場からは認めた伝承として、日課箇所外であるが関連する記事の中で、ヨハネが「わたしは水であなたたちに洗礼を授けたが、その方は聖霊で洗礼をお授けになる」(マルコ 1:8、マタイ 3:11、ルカ 3:16)と証言したという伝承も置かれている。

・9 節「ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた」の直訳は、「ヨハネによってヨルダンへと浸からせられた」。「ヨルダン川で」と訳されているが、「ヨルダン川」と訳される語の前には、前置詞「エン」(英語訳「in」)ではなく、前置詞「エイス」(英語訳「into」)が用いられており、「洗礼を受ける」と訳されている動詞「バプティゾー」の修飾句として置かれているので「ヨルダンへと…」となる。「バプティゾー」の原義は、「水に沈める／浸からず」こと。「バプティゾー」または名詞形「バプティスマ」は、ユダヤ教を含めて宗教儀礼としての「沐浴」を意味する用語としても知られ、その場合は前置詞「エイス」を取って、入信する宗教の神や師弟関係に入る教祖・導師の名が置かれる用法もある。ここでは、「ヨルダン」が川であることが明白なのでその「水」という物理的空間を用いての「バプティゾー」であったと解されるが、「マタイ」は並行箇所前置詞「エン」を取って「ヨルダン」を地理的位置として明示する表現を選んでいる。「マルコ」は、主イエスがヨハネによって「洗礼」を受けられたという事実を鑑みて、それが「ヨハネ」という導師・師匠への帰属を意味するのではないことを示唆しているのかもしれない。

・11 節「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」の直訳は、「あなたはわたしの子、愛する者、わたしはあなたを喜びとする」。「子」の原語は、「御子」と訳されることもある「ヒュイオス」。「マルコ」は、「神の子」という表現を、1:1、3:11、5:7、15:39 という限られた箇所ではしか用いていない(14:61 も参照)。

・「マルコ福音書」における「神の子」の用例。1:1「神の子イエス・キリストの福音の初め」は標題。3:11「あなたは神の子だ」は「汚れた霊ども」の発言。5:7「いと高き神の子イエス」も「汚れた霊に取りつかれた人」の発言。15:39「本当に、この人は神の子だった」は「百人隊長」の発言。なお、14:61「お前はほむべき方の子、メシアなのか」は「大祭司」の尋問の言葉。「マルコ」に登場するユダヤ人たちは、弟子たちも含めて、主イエスを「神の子」と認める発言をしていない。「マタイ」では、シモン・ペトロが「あなたはメシア、生ける神の子です」(マタイ 16:16)と発言している。

来週の誕生日 (6月1日～7日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-351「聖なる聖なる」(=☐12番、☐66番)は、19世紀初頭に英国教会司祭として詩作に活躍した R・ヒーバーが「三位一体主日」のために作詞。曲は、この歌詞のために 19 世紀に教会音楽家として活躍した英国教会司祭 J・B・ダイクが作曲し、「NICAEA(ニケア)」の曲名が付されている。
- ・21-475「あめなるよろこび」(= I 352)は、C.ウエスレーの代表的な讃美歌の一つ。『讃美歌 21』で改訳されている。曲は、ドイツ生まれでアメリカで活躍した音楽家ザンデルの作。近年は、別の曲(476 番など)と組み合わせられる場合が多い。
- ・21-410「昇れよ、義の太陽」は、20 世紀初期ドイツで告白教会の青年運動部長としてナチスと戦っていた牧師リートミュラーが複数の古い讃美歌を編集改作して作詞。曲は、ボヘミア兄弟団の讃美歌集に採用されていた民謡曲をリートミュラーが編曲。

21-351「聖なる聖なる」

Holy, Holy, Holy, Lord God Almighty

1. Holy, holy, holy! Lord God Almighty! / Early in the morning our song shall rise to thee. / Holy, holy, holy! Merciful and mighty, / God in three persons, blessed Trinity!
2. Holy, holy, holy! All the saints adore thee, / casting down their golden crowns around the glassy sea; / cherubim and seraphim falling down before thee, / which wert, and art, and evermore shalt be.
3. Holy, holy, holy! Though the darkness hide thee, / though the eye of sinful man thy glory may not see, / only thou art holy; there is none beside thee, / perfect in power, in love and purity.
4. Holy, holy, holy! Lord God Almighty! / All thy works shall praise thy name, in earth and sky and sea. / Holy, holy, holy! Merciful and mighty, / God in three persons, blessed Trinity.

21-475「あめなるよろこび」

Love Divine, All Loves Excelling

1. Love divine, all loves excelling, / Joy of heaven to earth come down; / Fix in us thy humble dwelling; / All thy faithful mercies crown! / Jesus, Thou art all compassion, / Pure unbounded love Thou art; / Visit us with Thy salvation; / Enter every trembling heart.
2. Breathe, O breathe Thy loving Spirit, / Into every troubled breast! / Let us all in Thee inherit; / Let us find that second rest. / Take away our bent to sinning; / Alpha and Omega be; / End of faith, as its Beginning, / Set our hearts at liberty.
3. Come, Almighty to deliver, / Let us all Thy life receive; / Suddenly return and never, / Never more Thy temples leave. / Thee we would be always blessing, / Serve Thee as Thy hosts above, / Pray and praise Thee without ceasing, / Glory in Thy perfect love.
4. Finish, then, Thy new creation; / Pure and spotless let us be. / Let us see Thy great salvation / Perfectly restored in Thee; / Changed from glory into glory, / Till in heaven we take our place, / Till we cast our crowns before Thee, / Lost in wonder, love, and praise.

21-410「昇れよ、義の太陽」

Sonne der Gerechtigkeit

1. Sonne der Gerechtigkeit, gehe auf zu unsrer Zeit; / brich in Deiner Kirche an, daß die Welt es sehen kann. / Erbarm Dich, Herr.
2. Weck die tote Christenheit aus dem Schlaf der Sicherheit, / daß sie Deine Stimme hört, sich zu Deinem Wort bekehrt. / Erbarm Dich, Herr.
3. Schau die Zertrennung an, der sonst niemand wehren kann; / sammle, großer Menschenhirt, alles, was sich hat verirrt. / Erbarm Dich, Herr.
4. Tu der Völker Türen auf; / Deines Himmelreiches Lauf hemme keine List noch Macht. / Schaffe Licht in dunkler Nacht. / Erbarm Dich, Herr.
5. Gib den Boten Kraft und Mut, Glauben, Hoffnung, Liebesglut, / laß Du reiche Frucht aufgehn, wo sie unter Tränen säen. / Erbarm Dich, Herr.
6. Laß uns Deine Herrlichkeit sehen auch in dieser Zeit / und mit unsrer kleinen Kraft üben gute Ritterschaft. / Erbarm Dich, Herr.
7. Laß uns eins sein, Jesu Christ, wie Du mit dem Vater bist, / in Dir bleiben allezeit, heute wie in Ewigkeit. / Erbarm Dich, Herr.
8. Kraft, Lob, Ehr und Herrlichkeit sei dem Höchsten allezeit, / der, wie Er ist drei in ein, uns in Ihm läßt eines sein. / Erbarm Dich, Herr.